

「砂町文化」を活かした防災活動

作成：江東区北砂6丁目在住 片野奈保子

「砂町の水辺と文化」、「E ボート」、「地域の底力再生事業助成」を活用し、
新たなる「水彩都市」を創り出そう！

①現状と課題

- ・江東区では、「水彩都市づくり」が「江東区の長期計画」の中にも定められている。区では、カヤック（豎川河川敷公園）や和船（横十間川親水公園）などの水辺に親しむ取り組みが行われている。
- ・「水辺に親しむ」が本当にいざという時の防災につながるのか、東北大震災の教訓を踏まえ、つなげなければならない。
- ・砂町エリアは、江戸時代は農業が盛んで、他の地域からくる物資の物流拠点として運河をたくみに利用してきた。しかし、水害に多く悩まされてきたエリアでもある。



カヤック（豎川河川敷公園）



台風24号 昭和36年10月10日
丸八通り（北砂6丁目付近）
「まちの記憶と未来展」冊子より

②今まさに「E ボート」の時代に

- ・小名木川には近年の整備により、たくさんの船着場が整備された。
- ・小名木川の巨大な堤防が取り除かれ、水辺に触れ合う環境ができた。
- ・「水彩」と「水災から身を守る」を両立できる環境が整っている。



小名木川 塩の道橋より撮影



小名木川 船着場

③E ボートとは？

- ・操作が簡単で安定性もよく、女性や子ども、高齢者や障害をもった人でも気軽に参加ができ、いざという時の災害に役立つことのできる**救命ボート**。



	誰でもすぐ乗れる	練習が必要？	防災時には？
カヤック	△	●	？
和船	× ※なれた漕ぎ手が必要	△ ※漕ぎ手の育成が大変	？
E ボート	●	●	●

☆E ボートにはこんなメリットも！

- ・川への関心が高まり、川を愛する人を育てることが出来るようになる。
- ・流域各地で交流の機会をもつことで、上下流交流の促進につながる。
- ・川に人が集うことになり、トイレや休憩所を含めた「川の交流広場」、「水辺の交流拠点」を整備しようという動きにつながる。
- ・E ボートの指導者育成を通じて、安全管理や川活用のマナーなどについて指導できる「川のインストラクター」を育てることができる。
- ・子どもに不足している水辺での体験学習を推進することで、今求められている「生きる力」を育てることが期待できる。

E ボートの「E」には、こんな意味も！	Exchange (交流)	川やダム湖などの水辺で人々が交流する。
	Environment (環境) Eco-life (エコライフ)	水辺や流域の環境を考え直すきっかけづくりになる。
	Entrance (入り口)	水辺体験の入門編・入り口(Entrance)となる。
	Everybody (誰でも)	子どもからお年寄りまで。
	Easy (簡単)	簡単に誰でもこげる。
	Enjoy (楽しい)	とにかく楽しい。
	Experience (体験)	水辺の素晴らしさを体験できる。
	Education (教育)	環境教育、防災教育にも活用できる。
	Emergency (緊急時対応)	水害や水辺の事故などの緊急時対応(Emergency)を身につけられる。

④東京都「地域の底力再生事業助成」の活用（詳しくは添付資料を参照してください）

町内会の予算は、年間計画が決まっているもの。

助成金を活用することで、東京都の相談も受けられ、「Eボートの購入」「イベントの開催」「運河の利活用」ができ、町内会の活性化にもつながると考えられる。

●地域の底力再生事業助成（HPより抜粋）

・「地域の底力再生事業助成」とは？

地域の課題や住民のニーズが多様化する中、行政だけでなく多様な主体（町会・自治会・企業・NPOなど）と連携し、公共的な課題を解決していくことが求められています。この「地域の底力再生事業助成」では、地域において多様な主体が連携し、積極的に課題を解決していく力を「地域力」とよんでいます。この助成金は、地域活動の担い手である町会・自治会の皆さんが行う地域の課題を解決するための取組を推進し、「地域力」の向上を図る事業に対して、東京都が助成を行うものです。

・平成24年第4回募集

平成24年9月3日（月）～平成24年11月9日（金）

・申請できる団体

申請できる団体の種類	略称(※)	例
区市町村の範囲を越えた地縁団体の連合組織	都町連	東京都町会連合会
区市町村を単位とする地縁団体の連合組織	町自連	〇〇区町会連合会 〇〇市自治会連合会
区市町村内の一部地域を単位とする連合組織	地区連	〇〇地区町会連合会
区市町村内の単一町会・自治会	単一	〇〇町会 〇〇自治会

・助成対象の取り組み活動

「東京都が取り組む特定施策の推進につながる取組」

- 1 防災・節電活動
- 2 青少年健全育成活動
- 3 高齢者の見守り活動
- 4 防犯活動

・助成金額

事業区分		補助率		
A 地域の課題解決のための取組		今までに本助成金を受けたことがある団体	助成対象経費の 1/2	都町連
		今までに本助成金を受 けたことがない団体	助成対象経費の 10/10	町自連
B 東京都が取り組む特定 施策の推進につながる取組				200 万円
分野	1 防災・節電活動	助成対象経費の 10/10		地区連
	2 青少年健全 育成活動	※次年度以降も同一分野で申請可。 ただし、補助率は助成対象経 1/2。		100 万円
	3 高齢者の見守 り活動			単
	4 防犯活動			20 万円

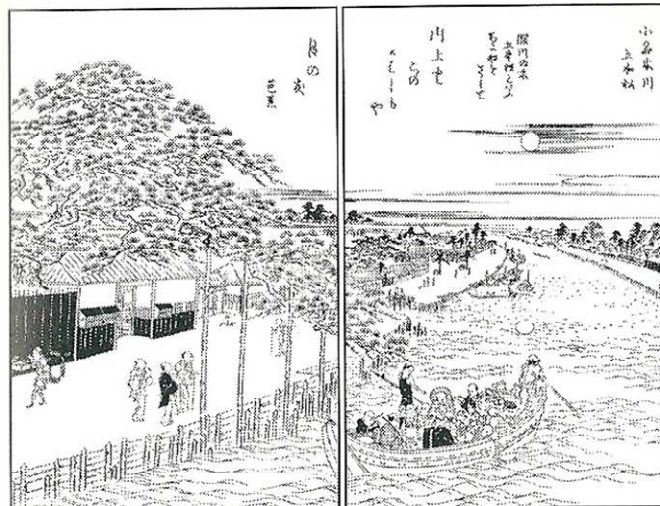
私たちのまちから、「水辺の新しい活用」を創造し、
「水彩都市」を私たちの力で創りだしたい！

⑤参考資料 「砂町」と「小名木川」には文化がたくさんある！

(江戸東京野菜 物語篇 大竹 道茂 (著)より抜粋)

●江戸時代の「小名木川」の様子

船により物資が運ばれている様子が分かる。



小名木川のようす(新訂 江戸名
所図会5「市古夏生・鈴木健一校訂、
筑摩書房刊より)

●砂村から始まった江戸の早出し栽培

寛文年間（1661~73）に中田新田村（砂町）の篤農家、松本久四郎によって「早出し栽培」が考案された。むしろを吊って北風を防いだ囲いの中に温床をつくり、魚のアラや落ち葉などを混ぜ合わせ、その発酵熱を利用する方法で、早出し栽培を実現させている。＝江東区はすでにごみを再利用していた。

●江戸っ子は、「女房を質に置いても、初物が食いて一」

他人よりも早く初物を食べたことを自慢したことから、早出し野菜は高く売れた。しかし天保13年（1842）には水野忠邦が、早出し禁止命令を出している。物価の高騰を招くばかりでなく、参勤交代で国元を離れた武士の多くは、単身赴任で質素な生活をしてきたことから、庶民が贅沢をして士農工商の身分制度が崩壊するのを危惧してのことだったとい。しかしこの禁止令、以前から何回も出されているが、あまり効果がなかったという。

●葛西地域の野菜は、小名木川の舟運で

徳川家康が江戸に来て最初に取り組んだことの一つに、隅田川と中川をつなぐ運河「小名木川」を、天正18年（1590）に開削したことがある。行徳の塩を江戸城まで円滑に運び入れるためであった。続いて、寛永6年（1629）には、中川と利根川をつなぐ「新川」を掘り、「古川（行徳川）」とを結んだ。東西葛西の農家にとっては、農産物を江戸へ運ぶための重要なルートであった。

その後、小名木川の北に並行して堅川を、また、大横川、横十間川も、万治年間（1658~61）に開削した。小名木川は物資の流通が主であったが、堅川、大横川、横十間川は、内陸の開発のために掘られた生活運河だった。流域には四ツ目市場をはじめ、大小の市場が形成されていった。当時は物資の運搬を舟運に頼っており、農家が昼間のうちに収穫した農産物を水路で洗い、脇に束ねて積んでおくと、夕方、船に積んで運ばれた。そして夜中のうちに小名木川を通過して京橋大根河岸の市場に運ばれ、市場では夜明けを待って売買されたという。

●野菜栽培の先進地であり続けた砂村

砂村は促成栽培とは別に、「旬の野菜」を露地栽培する一大産地としても発展していく。促成栽培は限られた期間に、限られた生産量しか出せないが、通常の栽培方法でもあらゆるものを露地で栽培していた。万治年間（1658~61）には、江戸庶民が好んだナス、キュウリの栽培も盛んになっていた。砂村に近い中川河口は、港としても優れていたために、江戸湾を北上し種なども舟運で運ばれていた。

屋形船も防災活動に乗り出した。

早起き！とうふ作り

読書 8・9

「身近な毒」たっぷり

スポーツ 17

名城敗れ引退表明



元スーパーフライ級王者の名城信男は返り咲きならず引退表明。

特報 24・25

なぜAKBそして次は

望 都の空から 28

駒沢オリンピック公園

サンデー版

焼き物のふるさと

社説	5	生活図鑑	20
碁将棋	5	地域	22
証券	6・10・11	暮らし	23
国際	10・11	歌壇俳壇	25
スポーツ	17・18・19	天佑なり	28

テレビ・ラジオ 13・14・16

中央区の会社で防災担当をしている吉川真さん(左)＝千葉県柏市＝は「どういうルートで千葉方面まで行けるのか、乗船して確認で

帰宅困難者訓練で屋形船「なわさだ」に乗り込む参加者ら＝1日、東京都中央区の明石町防災船着場で(市川和宏撮影)



水辺で救え 屋形船出動

防災の日帰宅困難者訓練

首都直下地震を想定し一日に行われた東京都の総合防災訓練で、帰宅困難となった高齢者や妊婦ら「災害弱者」を観光用の屋形船を使って、水路で搬送する訓練が初めて行われた。 関連27面

銀座やお台場などを訪れていた買い物客や観光客が一時避難施設で震災発生後の三日間を過ごした後、長距離を歩けない高齢者らを船で運ぶというシミュレーションを実施。二十三人の参加者は明石町

町防災船着場(中央区)から船に乗り込み、葛西臨海公園(江戸川区)まで四十五分かけて移動した。

参加者の一部は、高齢者や妊婦を疑似体験できるよう手足の動きを制約した器具を装着。周囲の人は、乗り降りや揺れる船内でトイレに行くのを手助けしていた。

埼玉県新座市の大学生吉田奈穂さん(左)は「器具を着けると体が思うように動かず、お年寄りは大変だと思った。災害時に弱者を助けたいと思うので、実際に経験ができて良かった」と話した。

きた」と話した。今年総合防災訓練は目黒区など約三十カ所を実施。四月に見直された都の被害想定で、山手線の外側に広がる木造住宅密集地域で大きな被害が出ると指摘された建物倒壊や大規模火災、ターミナル駅周辺に滞留する帰宅困難者への対応などを確認した。